

ろう。又神風なんてナンセンスだ、終戦の詔勅に示されたように、「耐え難きを耐え忍び難きを忍び」という聖旨を遵法すべきのみと、極めて常識的な主張であったように記憶している。

内務班での缶詰生活は次第に口数も少なくなり、陰鬱な日が多くなった。飛行場の方で煙があがっていると窓際で叫ぶ者がいたが、夜おそくまで赤々と夜空をこがしていた。多分機密文書・暗号書を焼却していたものと思う。二十日には復員命令が下達され、旅費・一週間分の米・携行糧食の支給が始まり、奇しくも八月十五日水戸航空通信学校で移動完了日を迎え、純粋に青春の血を沸かせた五日間であったが、アツケない幕切れでもあった。長くて短かったこの五日間を私は終生忘れることはない。

あとがき

瓦礫と混乱・飢餓の中から四十八年の歳月が経過し、私も齢六十九歳となりましたが、好い後継者と孫達に恵まれ、熟年を愉しむ今日この頃です。世界一の経済大国となり、国民は平和で豊かな生活を享受しています。こ

れは日本民族の優秀な国民性と、恒久平和を念願し努力した結果と確信しています。沖縄日本復帰の際、当時の総理大臣が「日本の戦後はこれで終わった」と声明したが、北方領土・中国残留孤児・従軍慰安婦問題等々、未だ未解決の諸問題が山積しています。一日も早くこれら諸問題を解決し、全世界の恒久平和と理想の実現に日本が出来る範囲内で積極的に貢献し、一日も早く世界から戦争がなくなること念願する一人です。

四十八年前の終戦記念日を回顧するとき、この大戦中戦場で国のために殉じた百九十五万人余柱の英霊と、空襲で或いは外地からの引揚げの途中等で死亡した一般邦人六十五万人のことを忘れてはならないと思います。

ここに謹んで、この大戦の犠牲となられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

『私の昭和二十年八月十五日』

宮城 清

昭和二十年といえは思い出多い年である。一月に父を

亡くしたため家を離れていたが帰郷した。

ガダルカナル・サイパン・比島のレイテと大戦も益々激しくなり、沖繩にも米軍が上陸し、三月十八日には我が浦代も初めて艦載機による射撃をうけ、個人でも被害をうけた家もあり、将来どんな事になるのかと不安の日々であった。又この頃から陸軍の兵隊が村に駐屯していたが、軍事訓練をするでなく、百姓の加勢をするため各家庭を廻り、仕事を探して歩くような始末で、変な思いをしていた。

三月も下旬になるとB29が毎日の様に來襲し、制空権は米軍の手に移ってこちらは逃げるのに大変で、防空壕を掘ったりして避難するのに苦労した。農作業等も手につかない毎日であったが、麦刈り芋植えは何とかして終えた様である。

八月に入ると一段と戦争は激化し、十四日には明十五日正午に天皇陛下の重大放送があると聞いたが、その放送は雑音が多くて聞きとり難く、無条件降伏とは全く予想しない、神国日本といわれていたのに情けない、諸先輩にすまない気持ちで何事も手につかず、やる気をなくしたものであった。

九月に入ると早速海外から復員軍人・引揚者等が続々と帰国、日本開闢かいびつ以来の食料難となり、食べられるものは何でも食べようと、現在では考えてもみない食生活であった。十二月近くになると他所どこから聞いて来たのか当地でも塩を作り、それを竹田・朝地の米作地まで運び、物々交換に一生懸命で飢えを凌ぐのに苦労した。こんな物々交換時代は二十三・四年頃まで続いた様に見える。

『終戦記念日に思う』

御手洗 進

昭和二十年八月十五日正午、私が天皇の終戦に関する詔勅(玉音放送)を聞いたのは浦代国民学校高等科二年生、満年齢は十三歳の時であった。太平洋戦争が終わって四十七年、あの日も今年の夏の様に強い陽射しの照り付ける暑い日であった。当時十三歳の子供も今は六十歳の還暦を過ぎ、痴呆症の兆しかそれにしても未だ少々早いが、時には物忘れもする今日この頃である。しかし、